会員のひろば

9月6日午前3時8分

苫小牧市医師会
あつまクリニック
石間　巧

何が起きているのか分からなかった。寝ているベッドのまま頭の方に飛ばされた。ただただ丸くなって「何なんだ何なんだ」と思うしかなかった。右側にドンッと音がして本棚が倒れてきた。しばらくベッドの上でじいっとしていた。

昨夜は「北の国から」のDVDを観て寝たんだったな。

「黒板さん、誠意ってなんだろうねえ」

周りは真っ暗で手探りで懐中電灯を探り当てた。本で踏み場のない部屋の中を進み引き戸を開けようとしたが開かない。廊下の本棚が前にズレて開かない。

階段を降りると納戸の酒が割れていた。ハスカップ酒の実が床に崩れて甘い匂いがした。

１階の廊下にはCDが崩れて足の踏み場が無かった。居間のオーディオが前向きにパソコンが横向きに倒れスタンドライトのガラスが割れていた。冷蔵庫は向きが変わりドアが開いていた。足に濡れた感触がありタッパーから飛び出た紅ショウガだった。テレビが台から前に落ちて土下座していた。

外に灯りの動きがあった。

「大丈夫ですか」と声をかけた。

「先生はパンツ一丁で」。

ガレージの端が30センチ下がっていてシャッターがふらふらになっていた。地割れができて薪がマウンテンバイクの上に崩れていた。僕の黄色いマウンテンバイク。

シャッターは上げたままマツダでそろそろと出た。まだ救急車の音も聞こえず街は静かに低く見えた。墓地の前で道が崩れていてもまだ黄色いテープや赤いコーンは無かった。

地震だったんだ。

クリニックはスタッフが２人来て片付けを始めていた。レントゲンの支柱が曲がり動かなくなっていた。内視鏡のラックが倒れ光源も地面に落ちていた。昨年買ったエコーは倒れていなかった。300万円もしたエコーをさすった。オイルヒーターが倒れて壊れていた。コピー機が倒れて角が割れていた。ハッピー薬局にはまだ人が来ていなかった。通用口はコピー機で塞がれていた。しかたなく無断で薬を持ち出した。

７時過ぎから患者さんが来た。

17歳の少年は、家族がまだ土砂に埋められたままだった。右足に痛みと腫れがあり、骨折が疑われたが、レントゲンは撮れない。シーネ固定をして、傷の処置をした。３日分の内服を処方するしかなかった。ロキソニンとセフゾンとムコスタ。治療が終わった彼は、待合室でしゃくりあげて泣いていた。ナースが背中をさすっていた。

地震だったんだ。

80歳の男性は、両手両足の爪の中が泥で真っ黒に汚れ、洗って消毒しようとした。しかし、何故か「そんなこといいから。いいんだから」と手を払いのけて、処置台から起き上がろうとした。ナースに何度も優しくなだめられていた。

物を調達しようと町役場に通った。紅いサルビアが咲いていた。

56歳の女性は「こんな時間にすみません。本当にすみません。本当にすみません」とつぶやいていた。右上腕と両下腿に多数の傷があった。洗浄していても小さく「本当にすみません」と天井を見ながら声を漏らした。

本木君僕たちは何を試されているんだろう。水も電気も無かった。ペットボトルの水で傷を洗いペンライトの光で縫合した。黄色いラヂオが「厚真町は震度７」と言った。

地震だったんだ。これは本当に大変なことになっていた。

夕方にトラックが発電機を下した。玄関ドアの隙間からコードを伸ばして入れた。発電機の電源ではすべては賄えない。使えたのは電球が一つ切れた無影灯のみだった。うす暗くなったクリニックに無影灯を向けた。来るかもしれない患者さんを待っていた。午後７時を過ぎて辺りはすっかり暗かった。「もう来ないようですね」とスタッフを帰した。正面も裏口も鍵はかけなかった。

さんまのかば焼きとメロンパンを食べた。９時を過ぎて休憩室に上がった。ぬるくなった缶ビールを１個開けて飲んだ。足を伸ばしてゆっくりと息を吐いた。外では発電機の低い音がしていた。

－今回の震災で被害にあわれたすべての方に、お見舞い申しあげます。また、心を寄せてくれた関係者の皆様に、お礼申しあげます。